

講義名	国文学			授業形態	
担当教員	小笠原 愛子	開講期・曜日・時限	後期 月曜日 4 時限		
		単位数	2	履修開始年次	1 年生

主題と概要

平安時代の物語である『源氏物語』を扱います。平安時代は和風の文化が一つの完成を見た時代であり、そのような時代に書かれた物語を読むことは、日本語を使う私たちにとって、大いに意義のあることです。また、『源氏物語』は、それ自身が優れた文学であるだけでなく、日本と中国の文学や歴史・文化を継承し、後世の文学・文化にも多大な影響を与えてきた、豊かな広がりを持つ作品です。読む人の個性に応じて、様々な学びや楽しみをもたらしてくれるでしょう。

到達目標

平安時代の物語作品を読むことを通じて、日本の文学と歴史・文化について知り、人間や人生について考えを深めることを到達目標とします。

提出課題

授業中に指示した小テストや、ふりかえりテストのための勉強など（範囲は授業中に指示します）。

課題（レポートや小テスト等）に対するフィードバックの方法

授業内で解説を行い、解答を提示します。

評価の基準

授業時の小テスト30％ / まとめの確認テスト70％

履修にあたっての注意・助言他

平安時代の物語を扱いますが、資料には現代語訳や語句の解説を付し、人物・場面の描写や筋立て等について、日本と中国の古典文学や文化・歴史等との関わりの中で考察していきますので、古典文学や古文単語が身につけていなくても理解できます。「物語」や「お話し」が好きなら、日本と中国の古い時代の文化に興味がある人には楽しんでいただけると思います。必ず鉛筆（シャープペンシル）と消しゴムを持参して下さい。マークシートの記入は鉛筆（シャープペンシル）以外使用不可です。

教科書

.使用しない.

参考図書

.なし.

その他

教科書は指定せず、授業中に資料を配付します。また、参考文献も「なし」としましたが、平安時代の物語や、中国の志怪小説・唐代伝奇小説については、現代語訳や漫画・小説など、楽しめる書籍がたくさん出版されています。特に『源氏物語』については、現代語訳だけでも非常に多くの種類があり、小説や漫画にも優れた物がたくさんあります。気に入る作品がきっと見つかると思いますので、是非本屋さんや図書館で探してみてください。

授業計画

- 1 はじめに：平安時代の「物語」について
- 2 『源氏物語』 「桐壺」巻 摂関期の帝と后妃達
- 3 『源氏物語』 「桐壺」巻 帝上の寵妃の悲劇 「長恨歌」とのかかわり
- 4 『源氏物語』 「桐壺」巻 母の怨望と息子の超人性
- 5 『源氏物語』 「桐壺」巻 「雨成の節定め」 「任氏伝」とのかかわり
- 6 『源氏物語』 「夕顔」巻 白く夢い謎の美女
- 7 『源氏物語』 「夕顔」巻 晴明の怪業（女の霊）
- 8 これまでの振り返り と まとめの確認テスト
- 9 『源氏物語』 「桐壺」 - 「若紫」巻 「紫のゆかり」の物語（「よく似た人」という設定）
- 10 『源氏物語』 「若紫」巻 『伊勢物語』 「古今和歌集」との関係（男が異世界で二人の女に出会う話）
- 11 『源氏物語』 「若紫」巻 北山の美少女（年齢の設定）
- 12 『源氏物語』 における予言と光源氏の子も逢
- 13 光源氏の華と栄華
- 14 栄華の絶頂で訪れる華の靨いと、続編への展開
- 15 おわりに： これまでの振り返り と まとめの確認テスト

毎回の授業の終わりに小テストを行います。この小テストは、出席カードを兼ねていますので、必ず提出して下さい。エラーなどが出ると、欠席扱い（0点扱い）になります。また、この小テストは、資料などを調べたり、周囲の人と相談したりしながら解答することができますので、授業に出ていれば高得点をとることが可能です。

確認テスト（2回）は、一般的な試験形式（筆記用具以外の持ち込み及び通信機器の使用不可）で、範囲が広いので、毎回の授業の後は必ず復習して下さい。

授業時間外の学修について
授業前：各々作品や巻について大まかに確認し、関連作品に目を通して下さい。（1時間）
授業後：授業で扱った資料及び小テストを復習して下さい。確認テストの準備をして下さい。（3時間）

授業形態（アクティブ・ラーニング）

ア：PBL（課題解決型学習）	イ：反転授業（知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態）
ウ：ディスカッション、ディベート	エ：グループワーク
オ：プレゼンテーション	カ：実習、フィールドワーク
キ：その他（A-L型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合）	

卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

古典文学作品を読むことを通じて人間と文化について考えることにより、自他と向き合い理解するための教養を育むことができます。そしてそのような教養は、自立した大人として、「真に豊かな社会」を思い描き、その実現に貢献するために必要なものです。

双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述

実務経験の有無及び活用

備考

授業中の小テストやまとめの確認テストによって成績を評価します。